

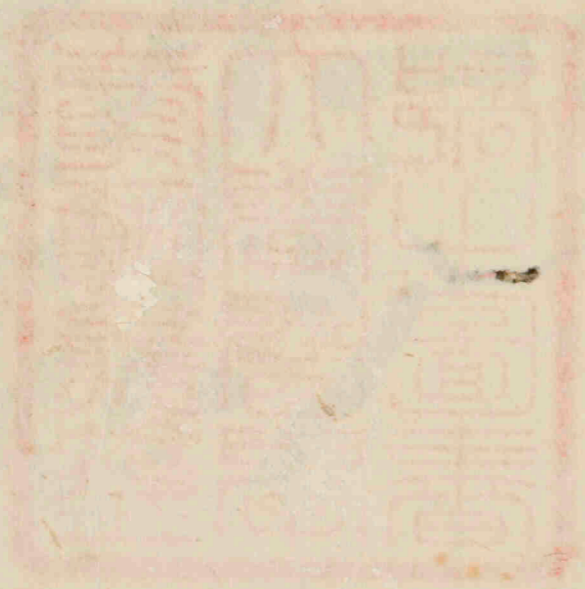
富士川室原



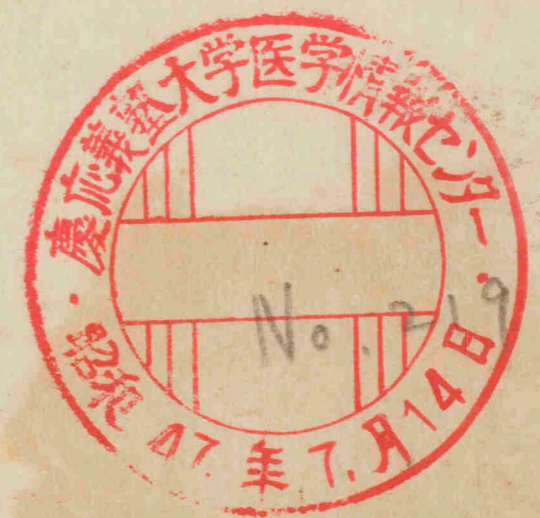
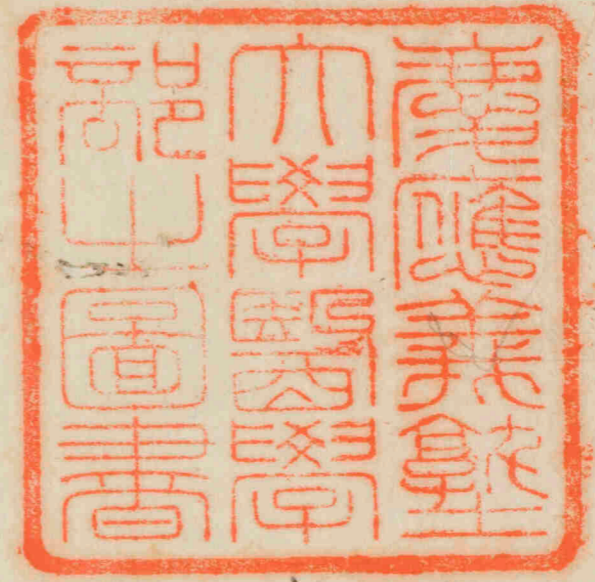
494.9

Ka

F
カ-43



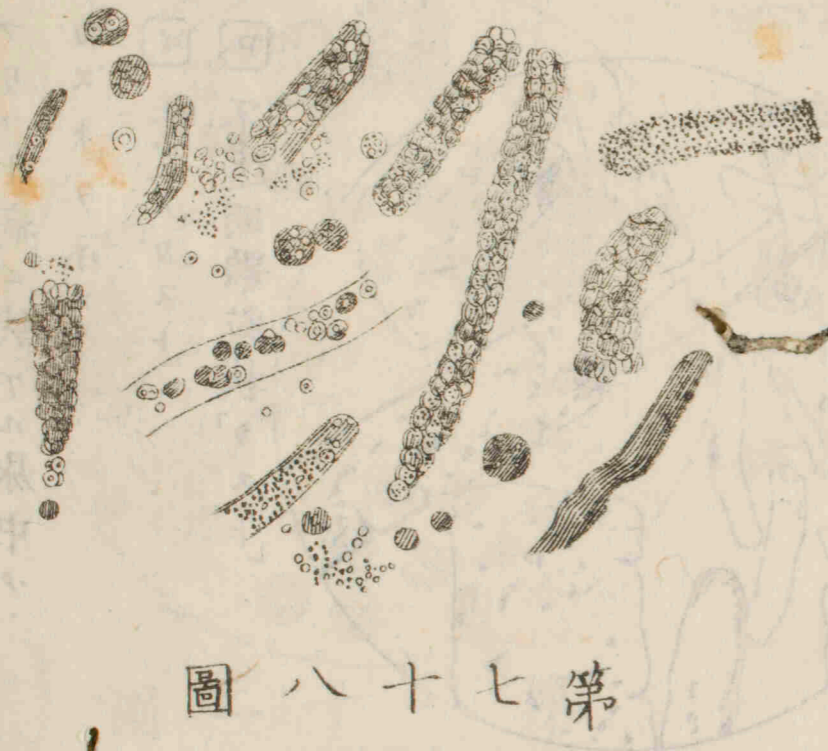
494.9
Ka



川文庫

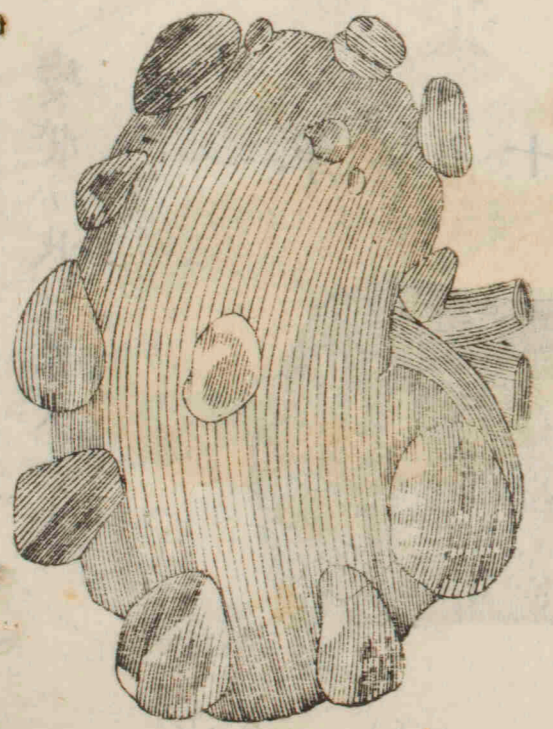
3134

第七十七圖



腎臟充血症ニ於ケル尿中ノ
沈澱物ヲ示ス

第七十八圖



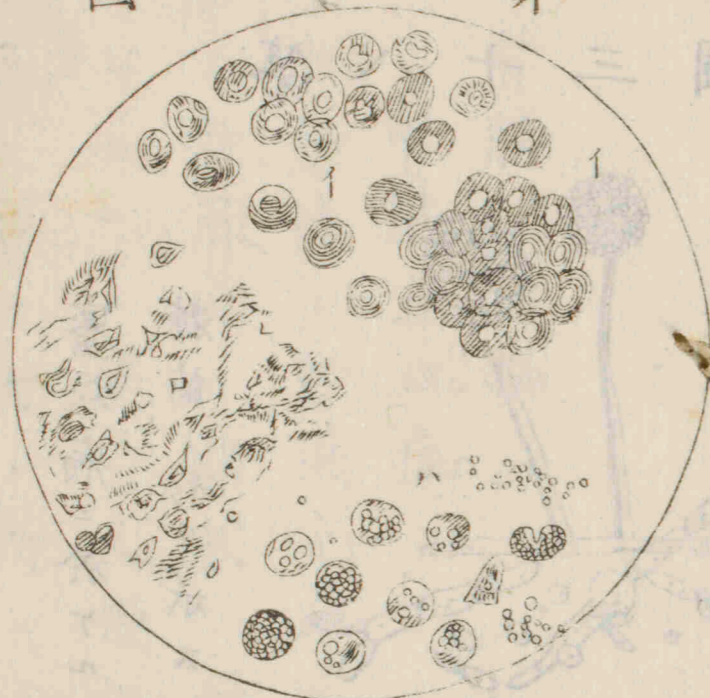
腎臟囊水腫ノ
形ヲ示ス

内科摘要

圖式

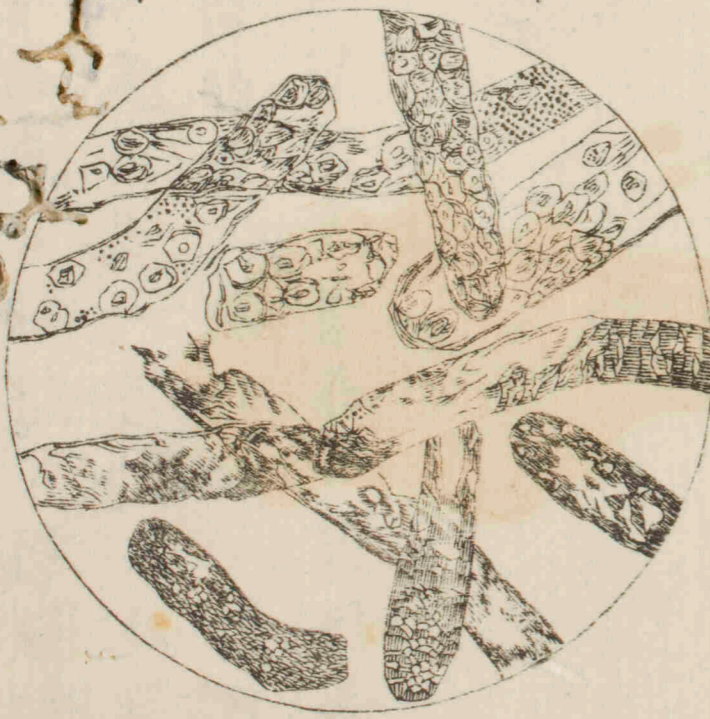
載余腎臟

第 一 十 八 圖



腎臟上皮ノ細胞ヲ示ス
 尋常細胞
 細胞ノ瘦削セル者
 細胞ノ脂化セル者

第 二 十 八 圖



蠟樣變質ノカスト
 ヲ示ス

第 七 十 九 圖



グリフト病ニ於ケル尿中ノ
 カストヲ示ス
 イ 上皮ノカスト
 ロ 不透明顆粒状カスト

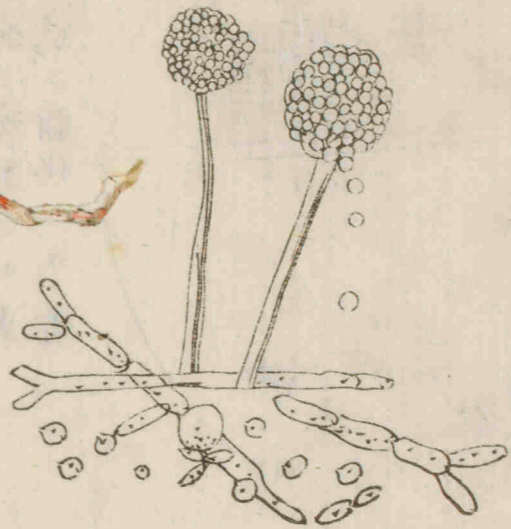
第 十 八 圖



腎臟初期ノ顆粒狀
 變質ノカストヲ示ス

金草齋藏梓

第十八圖



蜜尿病ニ於ケル尿中
糖菌ノ形ヲ示ス

華氏内科摘要卷之八

東京

桑田衡平

譯述

腎膀胱諸病

腎臟充血症

原由急性ノ腎臟充血症ハ冒寒光菁若ハ的列並
油ノ過用或ハ諸般ノ焮衝病若ハ熱性病ノ作用
ニ由テ之ヲ發シ又慢性ノ充血症ハ急性充血症
ヨリモ多ク見ル所ニシテ此症ハ肺臟ノ障碍之例

月斗高野

卷之八

藏除齋藏梓



ハ胸水、肺氣脹ニ或ハ妊娠若
於ケルカ如シ
即チ大
静脈
之カ為ニ其

血行ヲ妨クル者ニ於テ之ヲ發スル者ナリ

現症 此病ニ於テハ腰痛ヲ起シ手ヲ以テ脊椎ノ

兩側ヲ押壓スレハ之ニ由テ痛ヲ覺ユルヲアリ

又其尿ハ僅少ニシテ濃色ヲ呈ハシ或ハ之ニ血

ヲ交エ或ハ蛋白分ヲ含有スルアリ又顯微鏡ヲ

以テ之ヲ檢査スレハ往々「ヒブリノース、カスト」

ヲ按スルニ尿管ノ内面ニ纖維素ヲ見ルヲアリ

識別 此充血症ト腎ノ「グリフト」病トハ仔細之

ヲ檢査スレハ區別シ易シト雖モ偶然之ヲ診候

ル片ハ亦疑フ免レサル者アリ夫レ急性ノ充血

症ハ較著ノ原因アリテ俄ニ之ヲ發シ又慢性充

血症ハ必ス他部ニ形器的ノ病アリテ之ヲ誘發

シ時トシテ病勢ノ増減スルヲアルモ亦次第ニ

増進スル者ニ非ス是ヲ以テ此充血症ハ多少持

久シテ漸々増進スル所ノ本来ノ腎臟病トハ自

ラ異ナルナリ

療法 急性充血症ニ於テハ腰部ニ吸角ヲ貼スル

ヲ良トス但シ其瀉血ノ量ハ患者ノ體質ニ隨テ

宜ク斟酌スヘシ又蓖麻子油拘櫟酸麻屈涅失亞
若ハ瀉利塩ヲ與ヘテ大便ハ通利ヲ促シ而シテ
后全身浴若ハ半身浴ヲ行ヒ暫時浴湯中ニ止マ
ラシムヘシ

尿毒症 ユレミア甸

尿毒症ハ腎臟自己ノ官能ヲ失テ常ニ腎ヨリ排
泄スヘキ所ノ物質ヲシテ血中ニ混在セシムル
者ヲ謂フナリ乃チ之ニ由テ愈其症候ヲ現ハス
ニ至テハ頭痛眩暈嘔吐下利搐掣人事不省等

發シテ終ニ昏睡ニ陥リ以テ死ヲ致スナリ

病理夫レ尿毒症ノ直ニ其害ヲ為ス所ノ物ハ蓋

シ尿素タルヲ將タ血中尿素ノ分離ニ由テ二種
ノ諳母尼亞質ヲ化成シ之カ為ニ尿毒症ヲ發ス

ル者ナランカ未タ疑團ヲ免レスト雖氏其諳母
尼亞ニ由ルノ説ハ確證ナキヲ以テ之ヲ信據レ

難シ然ラハ則チ直ニ尿素ノ作用ニ由ルノ説最
モ信ス可キナリ又方今其血液ヲ損害スル者ハ

即チクレアチン、クレアチニシ及ヒ其他ノ元成
分ナリト云フノ説ヲ主張スル者アリ按スルニ

隨^二ハ平素筋纖維中ニ生^三シテ血^四ニ吸^五收^六セラレ
成^七セル物^八ヲヨリ化^九ス
成^{一〇}セル物^{一一}ヲ云^{一二}フ化^{一三}ス

療法 此病ノ療法ハ腎臟分泌ノ閉止ニ由テ生ス
ル所ノ物質ニ隨テ各異ナラサルヲ得スト雖
其緊要トスル所ハ畢竟唯血液ヲ清淨スルニ
リ故ニ若シ腎ノ機能ヲ整復スルヲ得可キ者ニ
ハ專ラ腎ヲ以テ排泄セシメ之ノ佐クルニ腸ト
皮膚トヲ以テ又腎ノ機能ヲレテ整復セシム
ルヲ能ハサルハ芥子泥^一ハ腸ト皮膚トヲレテ腎ニ代テ
排泄ヲ營マシム^二ヘシ即チ之カ為ニハ温浴若^三

蒸氣浴ヲ行ヒ若ハ居室ヲ温暖ニ保テ以テ皮膚
ノ蒸發氣ヲ催進スルヲ肝要トス^四又之ニ兼テ背
部^五即チ^六腎部ニ吸^七角^八ヲ貼^九レ若ハ芥子泥ヲ貼^{一〇}レ沃^{一一}實^{一二}丁^{一三}
幾ヲ塗擦スルカ如キ反對刺衝法ヲ行フモ亦可
ナリ又下劑ハ重酒酸^{一四}剝^{一五}篤^{一六}斯^{一七}瀉^{一八}利^{一九}塩^{二〇}等ヲ用ヒ其
人壯實ナル者ニ於テハ^{二一}エ^{二二}ラ^{二三}テ^{二四}ト^{二五}ム若ハ^{二六}コ^{二七}ロ^{二八}
ト^{二九}レ^{三〇}油^{三一}ノ如キ峻下劑ヲ用フヘキ^{三二}亦稀ニ之^{三三}ア
リ又利尿劑ハ多量^{三四}、里没奈^{三五}堇^{三六}飲^{三七}ヲ服^{三八}サシムル
ヲ以テ最モ良トス其他^{三九}ノ利尿劑ニ就テハ尚水^{四〇}
腫病ノ條下ニ於テ之ヲ論載^{四一}

腎臟炎 チフリチス句

晚近ノ泌尿器諸病ノ原病論ニ隨ハハ通例腎盂
 ノ化膿性嫩衝ノ外ハ總テ腎臟炎ノ名稱ヲ廢シ
 テ一ニ之ヲ「フリ」ト病トナシ之ヲ腎臟ノ急性
 充血症ト區別セリ但シ原病學總論ニ於テハ其
 說妥當ナラサルニ似タレ凡今日ノ實際ニ於テ
 ハ決シテ「支」ニル所ナシ何トナレハ腎臟炎ニ於
 テ發スル所ノ現症ハ大抵急性充血症若ハ「フリ」
 フト病ノ現症ト一致シ且其療法ニ於テモ亦然

リトス故ニ吾輩ハ斷然其說ニ從テ疑ヲ容レサ
 ルナリ
 夫レ急性腎盂炎ハ其症候真ニ劇甚シ腎臟充血
 症ニ似タリ乃チ手ヲ以テ腎部ヲ押壓スレハ之
 カ為ニ痛ヲ覺ユ全身發熱シテ其熱膿潰ニ至ル
 マテ荏苒トシテ解散セス尿中少許ノ血液及ヒ
 腎内上皮ノ細胞ヲ混スルヲ見ル而シテ其將ニ
 膿潰セントスルヤ必ス腰部ノ一局部ニ於テ暫
 時ノ間腫起ヲ現ハシ已ニ膿潰スルニ及ベテハ
 尿中亦膿液ヲ漏泄スルヲ久暫定リナシ

衡按スルニ此腎盂炎ノ療法
各異ナラサルヲ得スト雖氏概子先ツ充血症
ニ於ケルカ如ク局處ノ瀉血下劑温浴等亦能
ク之ニ適當スル者ナランカ

グリフト病 發明者ノ名ヲ以テ即
チ病名ト為スナリ

總論

グリフト病ハ腎臟造構ノ變ニ係ル所
病ニシテ詳ニ言ハハ蛋白尿及ヒ水腫ヲ發スル
一種ノ腎臟病是ナリ

區別及時期 此病ノ區別ニ就テハ諸說一致セス

ト雖モグリフト氏ハ曾テ之ヲ三種ニ區別セリ
又碩學ジヨンソン氏ノ說ニ據レハ之ヲ區別シテ

剝脫性腎臟炎ト剝脫性ナラサル者トノ二種ト
ス又フレリチ氏ハ其剝脫スルモ亦剝脫セサル

モ全ク唯本病ノ時期ニ關係スル者トシ之ヲ區
別シテ三期トス即チ充血期滲出期及ヒ變質期

是ナリ又解剖ノ變ニ據テ之ヲ論スレハ其腎平
滑ニシテ白色變大セル者平滑ニシテ變小セル

者外面粗糙ニシテ粟粒狀ヲ為シ且收縮セル者

及ヒ其收縮セサル者等ノ別アリ然氏「ローベル」
 ト氏ノ説ニ從テ先ツ之ヲ急慢ニ症ニ區別レ更
 ニ其慢性症ヲ三種ニ區別スルヲ穩當トス即チ
 第一種ハ急性ヨリ此慢性ニ陥リシ者即チ其腎
 ニシテ變即チ滑白色者第二種ハ初期ヨリ慢性ナル者即チ腎
 大セシ者赤色粗糙ニシテ又第三種ハ腎ノ蠟様或ハ澱粉様
 變質ヲ合併スル者是ナリ

原因

此病ニ罹ル者ヲ計算スレハ三人中男子ハ

二人ニシテ婦人ハ其一人ニ過キス又年齢ヲ以
 テ比較スレハ四十五歳ヨリ六十五歳ニ至ルノ

間ニ於テ最モ多シ蓋シ急性ブリフト病ノ原因
 ヲ尋スルニ寒冷濕潤ノ冒觸ニ由テ之ヲ發スル
 者最モ多ク猩紅熱、妊娠或ハ酒客モ亦之ニ亞ク
 者ナリ但シ此急性ブリフト病ハ青年ノ人ニ於
 テ殊ニ多シトシ慢性ノブリフト病モ亦寒冷濕
 潤ノ冒觸ニ由テ大ニ催進セラレト雖モ此症
 ハ飲酒ノ過度ニ由テ之ヲ發スル者太多シ其
 他痛風、全身煤毒若クハ膀胱及ヒ尿道ノ疾患モ
 亦此病ノ素因ヲ為スコトアリ六
 急性ブリフト病

現症 冒寒或ハ大醉或ハ猩紅熱ニ罹ルノ後患者
 俄然トシテ惡寒、頭痛及ヒ嘔吐ヲ發シ、背及ヒ四
 肢ニ疼痛ヲ覺エ、皮膚ノ蒸發氣閉止シテ呼吸困
 難トナリ、隨テ全身發熱シテ面部、軀幹及ヒ四肢
 ニ浮腫ヲ呈ハシ、加之ナラス胸膜内或ハ腹膜内
 ニ於テモ亦湧乙液ヲ滲出シテ以テ胸水若ハ腹
 水ヲ發スルニ至リ、而シテ其尿ハ少量ニシテ頻
 ニ便心ヲ催シ之ヲ檢查スルハ其質重クシテ之
 ニ血液ヲ混スルヲ以テ暗赤色ヲナシ多量ノ蛋
 白分ヲ含ムヲ見ル、又尿中ノ沈澱物ヲ取テ之ヲ

顯微鏡ニ照セハ血球、緩鬆ナル腎内上皮ノ細屑、
 細胞ヲ脱シタル核子、管狀ノ假膜及ヒ種々異様
 ノ纖維素及ヒコレラブリス糜爛シテ剝離ヲ見ルハ
 此病ハ一二週乃至三週或ハ其餘ヲ経ルノ後其
 歸スル所三様アリ或ハ恢復或ハ死シ或ハ慢性
 陷ル者是ナリ蓋シ其死ヲ致スヤ或ハ尿毒症
 ニ由リ或ハ肺炎、胸膜炎、腹膜炎若ハ心包炎ヲ繼
 發スルニ由リ或ハ又胸水、聲門水腫、腦水若ハ腹
 水ヲ發スルニ由ル者アリ但シ此急性デリスト

病ニ於テハ其恢復ヲ得ル者モ亦大約三分ノ二
或ハ其餘ニ至ル

療法

腰部ニ吸角ヲ貼シ温浴ヲ行ヒ若ハ

多トテ以テ腰部ヲ温保シ有カノ下泄藥例之ハ

重酒酸剝篤斯ニ藥刺巴ヲ伍用シ若ハ拘椽酸麻

強涅失亞ヲ用ヒ及ヒ拘椽酸剝篤斯民埜列里精

ノ如キ發汗劑ヲ用フルヲ良トス總テ汞劑ハ無

用ニ属ス又食餌ハ液質滋養ノ品ヲ與ヘ必ス辛

辣硬固ノ物ヲ禁ス

慢性ブリフト病

此病ノ經過ハ甚々緩慢ニシテ入數月若ハ累年ノ
后始テ發顯スルニ至ル者アリ乃チ其初メハ患
者漸々衰弱ヲ覺エ面色蒼白ニシテ或ハ膨脹シ
呼吸短促及ヒ小便頻數等ハ症狀ヲ現サスト雖
度是亦著シカラサル者アリ蓋シ此病ノ結局ハ
擣掣肺水腫視力乏弱若ハ某部ノ劇性焮衝等ヲ
發スルヲ以テ常トス
又本病ノ已ニ稍増進シテ諸症顯然タル者ニ於
テハ天抵皆左ノ症狀ヲ發ス即チ其尿中蛋白分
ヲ含ミテ管狀ノ假膜及ヒ腎内上皮ハ細屑ヲ沈

癥ニ肌膚枯燥ニテ小便頻數トナリ夜間殊ニ甚
 シク全身水腫或ハ胸水或ハ腹水ヲ發シ消化不
 良ニシテ貧血質ヲ呈ハシ其他尿毒症例之ハ頭
 痛眩暈、搖擧吐下及ヒ昏睡等ヲ發シ或ハ心臟膨
 大ヲ致シ或ハ諸部ノ激衝ヲ繼發ス殊ニ氣管支
 炎ヲ發スル者多シ但シ此病ハ一齊ニ増進セズ
 シテ通例發作間歇フナシ毎發必ス患者ヲシテ
 著シク衰弱セシムルニ至ル而シテ其發作中ハ
 症状殆ト急性ブリスト病ニ似タリ又其發作ニ
 先テ著シキ誘因アリ以テ之ヲ發動スルナリ

ト雖ヒ通例其再發スルヤ數週若ハ數月若ハ累
 年ノ久キヲ經テ來リ甚タ一定ナラサルナリ

豫后 此病ハ概テ治シ難キ者ニシテ大約其三分

ノ一ハ尿毒症ニ由テ死ヲ致シ其他局處水腫按

ルニ胸水腹水ノ如キニ由テ死ニ抵ル者セ亦頗

ル多シ又其五分ノ一ハ繼發ノ肺炎、心包炎若ハ

胸膜炎ニ由リ其餘ハ全身ノ衰脫、貧血、消化不良

皮膚水腫若ハ合併病例之ハ中風、肝臟硬結腫、肺

癆腸管ノ糜爛等ニ由テ終ニ不幸ニ陷ル者ナリ

識別 此病ニ於テハ火熱ト硝酸トヲ以テ其尿ヲ

試験スレハ容易ニ蛋白尿タルヲ證スハ即
 テ本病ノ蛋白尿ハ卒尔ノ原因アリテ之ヲ發ス
 ルニ非ス亦忽チ止ム者ニ非スシテ非再持久シ
 且水腫ヲ兼發スル者はナリ又顯微鏡ヲ以テ其
 尿ヲ検査スレハ腎内上皮ノ剝離セル細屑及ヒ
 管状ノ假膜ヲ見ルハク尚末期ニ至テハ其假膜
 ニ油點ヲ散布スルヲ見ルハシ但シ尿中ノ固形
 分殊ニ尿素ハ非常ニ減少スル者ナリ
 病理蓋シ此病ニ於テ蛋白尿ヲ起ス所以ハ腎臟
 組織ノ變質ニ由テ元來蛋白分ヲ含有セル血漿

液^カチ^チヲシテ更ニ之ヲ泌別スルコトナク殆ト直ニ
 腎ノ皮様部ヲ透シテ泌尿管ニ滲漏セシムルニ
 依ルナリ而シテ尿素ノ減少スル所以モ亦齊シ
 ク腎臟分泌機ノ障碍ニ歸スル者トス但シ腎臟
 ノ變質ニ數様アリト雖モ其論繁雜ニシテ此約
 説ノ能ク盡クス所ニ非サレハ學者宜クコロベ
 ルト及ヒヒール氏ノブリフト病論ニ就テ之ヲ
 詳悉スハシ

療法此ブリフト病ノ療法ハ第一腎臟ノ變質ヲ
 防キ第二尿毒症ト繼發ノ激衝トヲ豫防シ第三

貧血、水腫、胃弱等ノ合併症ヲ緩解スルヲ以テ通
則トス即チ其變質ヲ防カント欲セハ患者ノ攝
生及ヒ食餌ニ注意シテ能ク其度ヲ守ラシムル
ニ若クハナレ例之ハ寒冷濕潤ノ冒觸若ハ身體
ノ勞動ヲ避ケシメ若シ其人常ニ酒客タラハ宜
ク之ヲ戒メ其他總テ過度ノ事件ヲ禁スルヲ以
テ肝要トス衣服ハ「フ」ラ子ルノ襪衣ヲ著セシメ
テ温暖ニ保護シ且屢適宜ノ溫浴但シ冷ニ過ク
ハ惡寒ヲ覺
ス宜ク之ニ注意スハ肌膚緩
ヲ行ハシメ又大便ノ
通利ニ注意シテ日々恰好ク其通利ヲ得セシメ

附錄
金真齋補

且滋養ノ食餌就中牛乳モ亦欠ク可
ヲ與フル片
ハ大ニ裨益ヲ得ル「ア」ハ又醫藥ニ就テハ其人
胃能ク之ニ堪ユル者ニハ固ヨリ肝油ヲ以テ最
良トスト雖氏若シ之ヲ服シ得サル者ニハ寧口
鍍劑ヲ用フルヲ優レリトス或ハ肝油ニ鍍劑按
ルニ炭酸鍍ヲ配
用スル方アリヲ配用スルモ亦尤モ妙ナリ格
魯兒化鍍丁幾ハ一般稱用スル所ニシテ症ニ隨
テハ又枸橼酸鍍液若ハ炭酸鍍若ハ沃實鍍ヲ用
テ偉効ヲ奏スル「ア」九又曾テ收斂劑ヲ用フレ
ハ蛋白分ノ費耗ヲ遮絶スルノ効アリト云フ其

内斗摘要
卷八
十五
載余齋

說未々疑團ヲ免レスト雖モ若シ一症アリ之ヲ
 試ント欲セハ硫酸鍍諸母尼亞ヲ用フルヲ良ト
 ス但レ此慢性ブリフト病ニ於テハ敢テ腎部ノ
 反對刺衝法ヲ要セス然モ沃實丁幾諸硬膏等ノ
 如キ緩性ノ劑ハ之ヲ使用スルモ亦可ナリ
 又水腫ノ為ニハ温浴ヲ行フテ皮膚ノ蒸發氣ヲ
 催進シ且驅水下劑殊ニ重酒酸剝篤斯ニ乃乃至三
 乃ヲ取り之ニ藥刺巴十公乃至二十公ヲ混和レ
 頓服セレムルヲ一週間ニ二回或ハ三回ニ及ブ
 ヲ良トス而レテ若シ其水腫緊滿シテ之カ為ニ

危險ノ恐レアル者ニハ「エラテリ」ム六分公ノ
 一乃至四分公ノ一ヲ取り丸トシ毎四時ニ之ヲ
 與テ其効ヲ奏スルニ至ルヲ良トス然モ永ク峻
 下劑ヲ持長ニ用テ之カ為ニ患者ヲ疲憊セシム
 ルハ豈大ナル誤ナラスヤ何トナレハ其要唯一
 時ノ緩解ヲ得セシムルニアリテ本病ヲ治スル
 ニ非サレハナリ又患者温浴ヲ嫌ヒ或ハ之ヲ行
 フモ發汗ヲ促スニ至ラサルハ宜ク華氏驗温
 器ノ百三十度ヨリ百五十度ニ至ルノ蒸氣浴ヲ
 試ムルモ亦可ナリ蓋シ此蒸氣浴ハ大抵其効ヲ

奏スルカ故ニ衰弱セル患者ニ於テ殊ニ裨益アル者ナリ又利尿劑ハ就中醋酸剝篤斯甘硝石精及ヒ杜松子浸或ハ複方杜松子精ヲ最モ良トス但レ此利尿劑ハ無益ニ属スルコト多シ以上諸藥其効ヲ奏セス水腫緊滿スレハ亦套管鍼ヲ以テ腹水ヲ瀉スルコト要セサルギハ止ムコト得ス柳葉鍼或ハ金創鍼ヲ以テ其腫滿セル脛及ヒ足部ヲ乱刺スルモ亦可ナリ予ハ「アブセス」ラニヤト膿瘍ヲ破潰スルニ云フ以テ輕々腓腸及ヒ足跗ヲ乱刺スルコト良トス然レ之カ為ニ動モ

スレハ羅斯ヲ繼發スルノ恐レアリ故ニ此術ヲ行フノ後ハ頗々温湯ヲ以テ拭ヒ或ハ稀薄ノ「グ」リセリン水ヲ以テ洗ヒ或ハ豕脂若ハ冷凝乳ヲ塗擦シテ之ヲ豫防セシコトヲ要ス凡ソ此ブリフト病ニ併發スル所ノ諸症ハ各其本性ニ隨テ之ヲ療スヘキハ勿論ナリト雖レ医タル者常ニ必シモ本病ハ固ヨリ虚性ニシテ動モスレハ器質ノ變常ヲ起シ易キ者タルコトヲ忘ルヘカラス

尿石病 リチアシス

此病ハ腎若ハ膀胱中ニ加兒基質ノ沈澱物即チ尿砂或ハヲ生スル者ヲ謂フナリ

原因予國誌ヲ按スルニ男子ハ此病ニ罹ルノ

多キ之ヲ婦人ニ比スレハ殆ト十倍セリ況ヤ且

其死凶ノ多寡ニ於テハ必ス然リトス又年齡ニ

就テ之ヲ論スレハ此病ニ死スル者ハ五十歳以

上ノ人ニ於テ最モ多ク青年ノ人ニ於テハ太々

罕ナリ況ヤ五歳以下ノ幼穉ニ於テヲヤ又此病

ハ各土地ノ風土ニ係ル所アリ例之ハ猶英蘭依

蘭佛蘭西及ヒ埃及ニ於テ殊ニ多ク瑞典挪耳回

及ヒ阿士氏拉ニ於テハ寡キカ如シ我亞國ニ於

テモ亦鮮ナシトセス蓋シキンツカイ邦合衆國

ニ於テ最モ多カラシカ

識別膀胱中ノ尿石ヲ検査スルニハ打診ノ音響

ヲ以テ缺ク可ラサルノ診法トス而シテ又其結

石ノ性質ヲ知ラント欲セハ宜ク其尿ヲ検査ス

ヘシ乃チ明ニ酸性ノ反應ヲ呈ハス片ハ其尿石

ハ尿酸或ハ蔞酸加兒基或ハ此二物ノ抱合ニ由

テ成ル者ト知リ又固性亞兒加里性ノ反應ヲ呈

ハス片ハ燐酸加兒基若ハ炭酸加兒基ニ存スル共
 ナリ罕ヲ以テ成リ又揮發亞兒加里性ノ反應ヲ呈
 ハス片ハ假令ヒ其中心ハ何物タルニモセヨ表
 面ハ必ス燐酸諸母尼亞苦土ト燐酸加爾基及ヒ
 炭酸加兒基トヲ以テ成ル者ト知ルヘシ又其結
 石ノ膀胱中ニアル者ハ膀胱及ヒ背部ニ疼痛ヲ
 覺エ且龜頭ニ疼痛或ハ搔痒ヲ發シ畢丸牽引シ
 テ時々小便ノ頓ニ閉止スルアリ是レ即チ最
 モ著シキ現症ナリ
 但シ細小ノ尿砂ハ能ク尿道ヲ通過シ得ル者ナ

リト雖此症ニ於テハ患者背部ニ疼痛ヲ覺エ
 些少ノ冒寒若ハ消化不良ニ罹ル片ハ卒然寒戰
 ヲ起シ次テ發熱スルアリ即チ之ヲ尿砂病ノ
 發作ト謂フ又其尿砂ノ腎ヨリ輸尿管ヲ通スル
 ニ方テ劇甚ノ疼痛ヲ起スアリ而シテ此尿砂
 ハ概子尿酸及ヒ尿酸塩類ノ凝結ニ由テ成ル者
 ニシテ細小ノ尿砂モ時トシテハ甚シク膀胱ヲ
 刺戟シ之カ為ニ痙攣性ノ尿閉ヲ起スアリ故
 ニ其療法ニ於テハ尿液ヲ稀淡シ且之ヲ中和セ
 ヲムルヲ要ス例之ハ緩和飲料殊ニ多量ノ亞麻

外科摘要 卷八 鐵車齋

仁煎ヲ與ヘテ以テ尿ノ分泌ヲ增多シ且之ヲシテ稀淡ナラシメ又適宜ノ甘硝石精及ヒ重炭酸曹達ヲ取テ其發作ノ間之ヲ持長シ用フルト日ニ三四次ニシテ以テ尿酸及ヒ尿酸塩類ノ溶解ヲ促スヲ良トス

第百二十二方 重炭酸曹達三 甘硝石精六ヲ取

リ之ニ薄荷水ヲ加テ全量六汚ニ至リ溶和シテ日ニ三四次半汚許ヲ与フ此方尿酸性ノ尿砂ニ宜シ又尿砂ノ將ニ輸尿管ヲ通過セントシテ之カ為ニ慘痛ヲ發スルキハ鎮痛劑例之ハ阿片ヲ用ヒ

或ハ亞的兒若ハ亞硝酸酸化瓦斯ノ嗅引法ヲ行ヒ且全身浴ヲ行フテ永ク浴湯中ニ止マラシムルヲ良トス

豫防法 尿砂ノ素癖アル者即チ尿管ヲ鮮紅色ニ染ムルヲ以テ徵トス

ハ總テ刺戟性ハ食物ヲ禁シテ淡薄ノ食餌ヲ用ヒ午餐二時前ト臨卧トニ於テ水一杯ヲ飲マシメ以テ其尿ヲシテ常ニ稀淡ナラシメ又温浴按摩若ハ温衣ヲ着セシメテ斷ヘス皮膚ノ蒸發氣ヲ催進スルヲ良トス其他身體ノ運動モ亦此豫防法ニ於テ通例裨益アリトス又其尿常ニ酸

外科摘要 卷八 鐵車齋

性ヲ呈ハス者ニハ日々小量ノ重炭酸曹達醋酸
剝篤斯拘椽酸剝篤斯若ハ炭酸剝篤斯等ヲ與フ
ルヲ良トス
抑大ナル尿石ノ療法ハ從來許多ノ實驗ヲ以テ
特リ外科ノ手ニ歸スルト雖モ最近ニ至テ刀ヲ
用ヒスニテ之ヲ療スルノ法ヲ發明セリ曾テ「ロ
ーベルト先生ハ實ニ其然ル者ヲ目撃シ亦自ラ
之ヲ試験シテ其効ヲ得シ「アリト云フ乃チ尿
石ニ二様アリ一ハ亞兒加里ニ溶解スヘキ者一
ハ酸類ニ溶解スヘキ者はナリ而シテ其亞兒加

里ニ溶解スヘキ者ハ即チ尿酸尿酸塩類及ヒ「レ
スチン」ニシテ又其酸類ニ溶解スヘキ者ハ即チ
磷酸加兒基及ヒ蔞酸加兒基ナリトス故ニ「ロ
ーベルト氏ノ試験ニ依レハ醋酸剝篤斯若ハ拘椽
酸剝篤斯ノ稀溶水ヲ頻服セシムレハ大ニ其尿
ヲ中和スルノ効アリト云フ然モ彼固ヨリ其尿
石ハ仮令ヒ巨大ナル者或ハ陳久ノ者ト雖モ亦
必ス之ヲ溶解スト謂フニ非ス又磷酸加兒基ノ
尿石ヲ溶解センカ為ニ稀硝酸ヲ膀胱中ニ注射
スルノ法ヲ揭示セリ即チ之ヲ行ハント欲セハ

外科新書 卷八

金華齋

先ツ碎石器ヲ以テ其尿石ヲ破碎シ而シテ後此
注入法ヲ行フキハ殊ニ効アリト云フ又曾テ
ロヂー及ヒソーサーノ両氏ハ先鞭ヲ着テ此法
ヲ試ミシカ果シテ其偉効ヲ得シト二人ニ及ビ
シト云フ

尿崩 無味尿崩症ノ義ナリ テイベテス、イレンピエス旬

此病ハ尿ノ分泌非常ニ多量ナルモ其尿殆ト無

色ニシテ輕ク蛋白分ヲ含マス亦糖分ヲ有セス

口渴シテ飲液ヲ貪ル者ヲ謂フナリ

原因 此病ノ原因ハ數般アリト雖凡通例甚タ分

明ナラス又五歳ヨリ三十歳ニ至ルノ間ニ於テ
最モ多シ其原因ヲ推究スルハ頭部ノ打撲、貪飲、
腦病カ作若ハ炎天ヲ侵シテ身體ノ熱スル時俄
ニ寒冷ニ遭ヒ又ハ冷水ヲ飲ム等皆之ニ屬スル
者ナランカ

病理 此病ハ病理ニ就テモ亦各異ナル所アリテ

未タ之ヲ確定スルヲ得ス曾テ其屍ヲ剖觀セシ

ニ或ハ腎ノ變質若ハ消耗ヲ顯ハシ或ハ腎臟充

血ノ模様ヲ見シトアリ然凡其變質ハ大抵本病

繼發症ニシテ本性ニ非サルハニ想フ此尿

外科新書

卷八

九

戴徐齋藏梓

新編 外科 卷八 載余齋 辛

崩症ノ近因ハ腎臟毛細管ノ膨脹ニシテ其本源ヲ探ヌレハ別ニ遠因ノ存スルアリテ元來血液循環ヲ主トスル所ノ感傳神經ノ作用ヲ妨クルニ由ル者ナランカ

現症及經過 此病ハ卒然之ヲ發シテ一晝夜ノ尿量二十「ポイント」ヨリ四十「ポイント」ニ至ルヲ屢之アリ患者口渴甚シクシテ仮令ヒ之ニ飲液ヲ禁スルモ尿崩ヲ防止スルヲ能ハス皮膚枯燥シ病ノ持久スルニ隨テ漸々衰弱羸瘦スルニ至ル蓋シ此病ノ經過ハ各々大ニ異ナリ其短キハ一二週ヨリ

長キハ累年若ハ生涯ニ至ル者アリ或ハ稟賦此病ノ素因ヲ有スル者アリ又其經過中熱性病若ハ嗽衝病ニ罹リテ之カ為ニ本病ノ一旦恢復シ况ヤ其全治ヲ得ルヲアリ

療法 此病ノ療法ニ就テハ從來種々ノ方法ヲ試ムト雖ヒ未タ之ヲ確定スルヲ能ハス亦未タ曾テ特効藥アルヲ聞カス然ヒ其最モ試用ムヘキ者ハ硝酸剝篤斯、纈草、麥奴、鍊劑、明礬、石灰水、單寧酸、沒食子酸、結列屋、曾篤及ヒ、鰐魯密度剝篤斯ナトス其他項窩ノ發泡膏モ亦應効アリト云フ

外科 卷八 載余齋 辛

蜜尿病 ダイベテラス、メルリヒス

此病ハ小便非常ニ多量ニシテ且尿中糖分ヲ含ム者ヲ謂フ故ニ亦之ヲ「グリコユリア」按スルニ糖尿ノ義ト名ク

原因男子ハ此病ニ罹ルノ多キ之ヲ婦人ニ比スレハ正ニ二倍ニ青年及ヒ中年ノ人ニ於テ最モ多シ又此病ニ死スル者ハ十五歳ヨリ五十五歳ニ至ルノ人ニ於テ最モ多シ又土地ニ就テ之ヲ論スレハ大都及ヒ諸製造ヲ以テ業トスル土

地ノ人ハ此病ニ罹ルノ開潤ノ田舎ニ於ケルヨリモ多シトス又稀ニハ遺傳ノ素因ヲ有スル者アリ其原因ハ未タ詳ナラザレモ蓋シ寒冷濕潤ノ冒觸力作若ハ炎天ヲ侵シテ身體ノ熱スル時慢ニ冷水ヲ飲ム者甘味ノ食物ヲ貪ル者常ニ大酒スル者劇シキ精神ノ感動諸熱性病及ヒ腦脊髓ノ形器的諸病及ヒ損傷等之カ誘因ト為ルト見ユ

現症及經過此病ハ陰ニ之ヲ釀シテ初メハ患者自ラ之ヲ識ラス唯身體少シク違和ヲ覺ヒ稍羸

ナレハ此蜜尿性カタラクトハ唯偏眼ニ於テノ
ミ之ヲ發スルヲアリ且之ヲ發スルヤ必ス末期
ニアリ況ヤ其試験セシ所ノ蝦蟆ノ「カタラクト」
ハ全ク一時ノ「カタラクト」ニシテ必ス持續スル
者ニ非サレハナリ

解剖及病理 蜜尿病ノ病理ニ就テハ從來未タ判
然タラサル所多シト雖モ現今大ニ發明スル所
アリ夫レ蜜尿病ニ死スル者ヲ剖觀スルニ腎臟
ニ於テ多少ノ變化ヲ現ハス者其半ニ過キス其
餘ハ全ク腎臟ニ係ハラサル者アリ是ニ於テ生

理家肝ノ糖分ヲ生スル作用ニ就テ其自然ノ發
見ヲ鑿ミ尚之ヲ獸類ニ實驗シテ豫メ病ノ本源
ハ即チ肝臟ニ在ルヲ究メリ又一説ニ延髓ヲ
刺衝スレハ蜜尿病ヲ發スルヲ以テ即チ腦底ニ
アリト云フ然モ解屍ノ検査ニ於テハ往々其根
跡ヲ現ハス者アリト雖モ亦全ク其徵候ヲ欠ク
者多シ故ニ此蜜尿病ニ就テハ其論未タ真正ヲ
得タリト謂フ可ラス尚後來ノ發明ヲ俟テ之ヲ
詳悉セント欲ス又茲ニ一説アリ其言巧ニシテ
最モ信ス可キニ似タリ曰ク神經ノ變調ニ由テ

肝ノ同化機其常ヲ錯マリ以テ胃腸ヨリ吸收セ
ラレテ門脈ヲ通過シ来ル所ノ包水炭化物按ス
質即チ澱粉ヲシテ悉ク之ヲ糖質ニ交換シ腎ヲ以
テ之ヲ尿中ニ排泄セシムル者ナリト

本註

司トル所ハ澱粉ヲシテ之ヲ糖化シ而シテ後
之ヲ血中ニ歸シ酸化シテ以テ焚燬ヲ起スニ
アリト云フ又パタニ氏ノ説ニ曰ク其糖化ハ
必ス病機變常ニシテ或ハ肝中之ヲ視ルニア
ルモ全ク死後ノ生出ニ由ルト兩説孰カ是

ナルヤ未タ之ヲ審辨スルコト能ハスト雖ハ蓋

シ肝臟自然ニ產物ハ澱粉質ノ品類例之ハハ

パタニ、肝ノシキストリシ及ヒグリコーゼン

等タルコト粗一定スル所ナリ又獸類ニ於テ試

ニ腦底ノ第四房ヲ刺シテ呼吸機ヲ妨ケ或ハ

肝臟ニ細鍼ヲ刺シテ腹部靜血脈ノ循環ヲ妨

ケ或ハ酸類ヲ靜脈中ニ注入シ或ハストリキ

ニア若ハウーラハヲ與ヘテ其毒ニ瞑眩セシ

メ或ハコロ、ホルムヲ嗅カシムルハ皆此

蜜尿病ヲ作為シ得可シ輓近碩學エム、ドシ

斗箇西 卷八 三六 載徐齋載粹

新編... 卷八... 金... 蘇... 補... 補...

子ル氏新説ヲ唱ヘリ曰クグリコーゼン按ニ即チ糖質ノ一種類ハ平常肝中ニ於テ飲食ニ依テ資ル所ノ含窒素物ト結合シ以テ身體組織ノ成形素ヲ成ヌ者ニシテ蜜尿病ハ即チ此機能ノ廢絶セル者ナリト

識別其尿ヲ検査スルニ糖分ヲ含ムト久レク連續スル片ハ是ヲ以テ其蜜尿病タルヲ認ムルニ足ルナリ即チ其糖分ヲ查出スルノ法ハ種々之アリト雖氏茲ニ其一ニヲ揭示セシム
ムール氏試驗法適宜ノ尿ヲ取テ之ニ其分量ノ

剥篤斯水ヲ加ヘテ煮ル片ハ其尿糖分ヲ含ム者ハ必ス初ニ黄色ヲ呈ハシ次ニ茶褐色ニ變ス又之ヲ透見スレハ瑩々タル赤色ノ液ナリ

トロムメル氏試驗法尿ヲ試験管ニ入レ先ツ之

ニ濃丹礬水二三滴ヲ加ヘ次ニ剥篤斯水ヲ注加シテ殆ト尿量ノ半ニ至リ注意シテ之ヲ火熱ニ當レハ其尿糖分ヲ含ム者ハ必ス帶黃褐色若ハ帶赤褐色ノ沈澱物即チ酸化銅ヲ生ス

豫后蜜尿病ハ決シテ恢復シ難キ者ニ非スト雖其鬼錄ニ上ル者モ亦尠ナシトセヌ又假令ヒ

内科摘要 卷八 五 載余齋藏萃

全治ヲ得サルモ其患者ヲシテ永ク輕快ヲ保タ
シムルヲ得可シ而シテ其人幼弱ナルハ愈危險
ナリ之ニ反シテ老人ハ殊ニ永ク此病ニ堪ユル
ヲ得テ甚シク健康ヲ害スルニ至ラサル者多
キニ似タリ又精神ノ感動或ハ損傷ニ起因スル
ト亮然タル者ハ之ヲ其原因曖昧タル者ニ比ス
レハ恢復ヲ得ル者較多シトス但シ此病ニ於テ
若シ視力之弱カタラクト蛋白尿及ヒ肺勞ノ諸
症ヲ發スルハ必ス難治ノ徵ニシテ尿量及ヒ
糖分ノ著シク減少スル者ハ其豫后必ス幸福ヲ

附錄材料
金華藥材

期スヘシ然ル又此密尿病ヲ患フル者ハ輕微
冒寒ニ罹ルモ之カ為ニ甚シキ激衝病ヲ併發シ
テ命期ヲ促ストアルカ故ニ宜ク攝生ヲ守ラレ
ムヘシ

療法

蓋シ體中糖分ヲ釀成スルノ機能ハ未タ醫
藥ノ以テ之ヲ抑制スル者アルヲ聞カスト雖
其糖化スヘキ食物ヲ禁シテ其勢ヲ減却スル
ハ敢テ裨益ナキニ非ストス曾テ碩學ハルレ
氏ハ患者全體ノ秤量ト尿中糖分ノ多寡トヲ比
較スレハ真ニ病ノ吉凶ヲ試驗スルニ足ルト云

內科摘要
卷八
五十六
載余齋藏書

本草綱目
卷八

金華齋

故ニ蜜尿病ノ療法ニ於テハ古來尚砂糖澱粉
類及ヒ之ヲ化成スル所ノ食物ヲ禁スルヲ以テ
最要トス例之ハ尋常ノ蒸餅馬鈴薯及ヒ諸種ノ
野菜及ヒ果物ヲ廢シ唯カベ^レー^レジ^レゴ^レリ^レ各
タ^レ一種葱^スビ^タチ^ホウ^レレ^キス^玉葛^及ヒ^セ
レ^リ一^オラ^ニヲ^食スルヲ^許ス又^動物^食ニ^就テ
ハ唯^牛乳^及ヒ^肝肉^ヲ禁^レ諸般ノ^肉類^卵牛^酪及
ヒ^ゼル^リ一^ヲ食^スルヲ^許ス總^テ強^烈ノ^酒精^赤
葡萄酒及ヒ麥酒ハ通常之ヲ戒ムト雖^比若^シ體
質^虛弱ノ^者ニ^於テ^之ヲ^用ヒ^ント^欲セ^ハ糖^分ノ

最^モ少^キ酒^類例^之ハ^少量ノ^設里^酒ト^若
ハ^疾スキ^一酒^ニ撰^用ス^ヘシ^又渴^シテ^多量ノ^水
ヲ^欲スル^者ハ^仮令^ヒ之^ヲ制^限スル^モ決^シテ^益
ナ^レト^ス又^食物^ニ就^テハ^人各^好惡^スル^所アリ
動^モス^レハ^食欲^ヲ失^フト^アル^ヲ以^テ宜^ク上^件
許^可スル^所ノ^品類^中時^々其^品ヲ^換へ^且其^烹調^ヲ
更^タム^ルヲ^良ト^ス
醫^藥ニ^就テ^ハ未^タ曾^テ此^病ヲ^防止^スル^ノ卓^効
ヲ^奏スル^者アル^ヲ聞^カス^蓋シ^尿量^ヲシ^テ著^シ
ク^減少^セシ^ムル^者ハ^獨リ^阿片^ニ歸^スル^ト雖^氏

内科摘要

卷八

三七

或余齋

内科摘要 卷八 鐘朝齋撰

是レ亦敢テ本病ノ増進ヲ遮絶スル者ニ非サラ
カ碩學ズモラ氏ハ項部ニ貫穿打膿法ヲ施シ
テ一患者全治ヲ得レトヲ記載セリ其他醫家各
種々ノ藥劑ヲ試験シテ各讚賞スル所アリト雖
氏仔細ニ之ヲ檢查スレハ何レモ皆其効確切ナラ
サルナリ就中亞兒加里塩、醱酵、レソ子ト、ペプシ
ン、銹劑、規尼、結列屋、曾篤、明礬、沃顛、硝酸、的列並油、
枸橼酸、曹達日ニ半ヲ至一ヲ及ヒ酸素ノ吸引法ヲ最モ
適當トス或人曾テ隨意ニ砂糖ヲ食セシメテ充
分ニ之ヲ試験セシカ其効果シテ虚カシト

ナリ畢竟蜜尿症ノ藥ハ未タ發明スヲ得サル
トト見ユ

腎臟水腫 ヒドロチフロシス旬

此病ハ輸尿管ノ壅塞ニ由テ腎ノ膨大セル者ヲ
謂フナリ

原因曾テ腎ノ膨大症ヲ収録スル者ヲ閱ルニ生
來部分ノ畸形ニ係ル者甚々多シト雖凡出生ノ
後新ニ結石ヲ生シテ輸尿管ヲ阻塞シ之カ為ニ
腎臟水腫ヲ發スル者最モ多シ其他器械的ノ壓

内科摘要 卷八 天 載余齋撰

外科掛立 諸 金 韓 齋 雜 林

迫ニ由テ輸尿管ノ壅閉セララル、片モ亦之ヲ發スルナリ

識別 胸下ヨリ臍傍及ヒ腸骨部ニ至ルマテ腫脹

大抵左或ハ右ニ觸ル、ニ柔軟ニシテ稍顫

動スルヲ覺エ其邊緣ハ不齊ニシテ出没ヲ為シ

又之ニ打診ヲ行フ片ハ必ス波動及ヒ濁音ヲ發

ス殊ニ男子ニ於テハ是ヲ以テ腎臟水腫或ハ腎

臟膿瘍ノ徴トス但シ偏腎之ニ罹ル片ハ患者殆

ト平穩ニシテ著レキ症狀ヲ發スルナリト雖

片尚腎共ニ連累セララル、片ハ之カ為シ終ニ尿

毒症ヲ繼發スルニ至ル又其腫脹ハ絶テ疼痛ヲ

發スルナク手ヲ以テ押壓スルモ亦痛ヲ覺ユ

ルナリ蓋シ此病ハ太々罕ナリト雖モ尿毒症

ヲ起シ或ハ膜囊ノ破裂シテ其蓄液腹内ニ汎濫

スル片ハ之カ為ニ死ヲ致スナリ然モ其幸ニ

シテ數年ノ久シキヲ保チ得ル者モ亦鮮ナリト

セス

療治 毎日手ヲ以テ輕々腹部ヲ按搥スル片ハ之

ニ由テ腎ノ腫脹ヲ緩解シ得ルナリ然モ其腫

起愈増大シテ他ノ臟器ヲ壓迫シ或ハ尿毒症ヲ

外科掛立 卷八 識 齋 齋 齋 齋

外科摘要 卷八 金華齋有林

起レテ之カ為ニ生命ノ危険ヲ慮ルノ時ニ至ル
ニテ他ニ施ス可キノ術ナク亦試ムハキノ藥ナ
レ乃チ若シ然ルキハ止ムヲ得ス套管鍼ヲ以
テ其蓄水ヲ瀉スルモ亦可ナリ曾テ數回反復シ
テ此術ヲ施シ以テ其腫脹ヲ緩解シ得レヨアリ
腎臟膿瘍 ピオ子フロリス旬
此病ハ殆ト腎臟水腫ニ似タリト雖凡多少焮衝
ヲ兼發シテ腎ノ膿潰ヲ生スルヲ以テ異ナリト
ス故ニ腎ノ膿瘍ハ之ヲ腎臟水腫ニ比スルハ病

性較急劇ニシテ其豫后モ亦愈ルニシテ乃チ腎
已ニ破潰スルニ及ンテハ其膿結腸若ハ十二指
腸ヲ穿透シ或ハ腹膜内ニ汎溢スルニ多ク然ル
キハ必ス不幸ヲ致ス者ナリ又此腎臟膿瘍ハ他
ノ膿毒若ハ「エムボリズム」按スルニ他部ヨリ疑
スル者ニ由テ之ヲ發スルニ即チ斯ノ如キ
症ニ於テハ其膿腹皮ヲ穿チ自ラ排泄スルニ
ルガ故ニ其將ニ破潰セントスルヲ察セハ宜ク
温巴布ヲ貼シテ之ヲ促シ症ニ隨テハ又之ヲ切
開シテ其膿ヲ漏泄セシムヘキナリ

外科摘要 卷八 三十 藏徐齋藏粹

外科摘要 卷八 金朝 癩瘡

衡 按スルニ偏腎斯ノ如キ者ハ幸ニレテ安全

ナルヲ得ヘケレバ兩腎共ニ侵サルハ其ハ恐

クハ生命ヲ保續スルヲ能ハサラセカ

腎臟癌腫 カニクハ、オフ、

其ノ年齡ニ於テハ腎臟獨リ癌腫ヲ發スルヲ太

夕罕ナリト雖モ幼穉ノ小兒ニ於テハ往々之ヲ

見ルヲアリ又大人ハ男子ニ於テ殊ニ多シ又癌

性惡液質ノ人ニ於テ之ヲ併發スルハ他ノ癌

腫症ニ異ナルヲナシ蓋シ此腎臟癌腫ハ概テ髓

様癌腫ニ属ス而シテ其脈絡多ク錯綜スル者之

ヲ「ホレダス、ヘマトーデス」按スルニ出血性ト名

ク此癌腫ハ每常必ス腎ノ皮様部ヨリ始リ其腫

大スルヲ頗ル盛ナル者ニシテ「ローベルト氏ハ

曾テ一患者ニ於テ秤量三十一ポンドニ至ル者

ヲ見シトアリト云フ但シ此病ハ兩腎共ニ侵サ

ル、ト太夕罕ナリ

識別 此病ノ識別ニ於テハ先ツ腹内ニ腫瘤ヲ生

シテ時々多量ノ尿血ヲ起スヲ以テ之ヲ證スル

ニ足ルヘシ乃チ其腫起ハ偏側ノ季肋ト腸骨ノ

外科摘要 卷八 三十一 癩瘡

外科摘要 卷八 金華藏書

雞冠突起トノ間ヨリ始リ漸ク増息スルニ及
テハ上下及ヒ前ニ廣張シ其甚シキニ至テハ殆
ト全腹ニ充滿スル者アリ此癌腫ニ於テモ亦猶
諸他ノ腎臟腫ニ於ケルカ如ク其前部ニ結腸
リ加之ナラス小腸ノ一部モ亦之ト並列スル
アリ故ニ打診ヲ行ハント欲セハ宜ク腸上ヲ避
ケテ之ヲ行フヘシ必ス濁音ヲ奏スル者ナリ又
手ヲ以テ之ヲ按スレハ自若トシテ運轉スル
ナク其形或ハ平圓或ハ出沒不齊ナルアリ又時
トシテ一種ノ波動ヲ覺ユルトアリ曾テ一患者

其腫ノ搏動ヲ現ハス者ヲ目撃セリ
蓋シ此癌腫ハ通例多量ノ尿血ヲ起ス者ニシテ
殆ト其半ニ居ルト云フロイベルト氏ハ一患者
ノ脾臟肥大症ニ於テ尿
血ヲ起セリ者即チ此尿血ハ他ノ腫瘤ニ於テハ
決シテ之ヲ發スルトナシ故ニ腎ノ腫瘤ニシテ
尿血ヲ發スルキハ必ス此癌腫症タルノ徴ナリ
其他顯微鏡ヲ以テ其尿ヲ検査スルニ「カニク
セル即チ癌ヲ見ルキハ愈之ヲ確證スルヲ得ヘ
シ然レ此癌腫ニシテ其細胞ヲ見サルトアリ故
ニ唯細胞ヲ現ハスヲ以テ之ヲ證シ難シ又腎臟

内科摘要 卷八 三三 載余齋藏

外科摘要 卷八 三三 鐵車齋藤排

癌腫ハ大抵疼痛稀ニハ之ヲ兼發スル者ニシ

テ其劇甚ナル者ニ至テハ其痛射ルカ如ク輸尿管ヨリ延テ股邊ニ及フコアリ然レ手ヲ以テ腎部ヲ押壓スルニ於テハ之カ為ニ痛ヲ覺ユルコ

罕ナリ其他胃腸不和ノ諸症ヲ發スレレ此等ノ症候ハ種々變換シ易クシテ一定ノ徵ナシ又病

ノ末期ニ至テハ羸瘦及ビ浮腫ヲ發ス是レ即チ

虚衰ヲ極ムルノ徵ナリ

經過 此病ノ經過ハ小兒ニ於テハ七個月乃至八

個月ヲ以テ中算トス然レ大人ニ於テハ二年餘

ニ及ブ者アリ又之ヲ他ノ臟器ノ癌腫ニ比スレハ

一持久スル者ナリ

療法 此病ニ於テモ亦猶他ノ惡性病ニ於ケルカ

如ク根治ヲ企謀スルモ及ハサル所ナリ故ニ唯

患者ノ攝生ヲ謹戒シテ滋養ノ食餌ヲ與ヘ且時

々鎮痛藥ヲ用テ其劇痛ヲ緩解スルノ外復々他

ニ伎倆アルコトナシ

腎臟結核 左バニクルオス

腎臟結核 ゼ、キヅ子一英

腎臟結核ニ獨發症アリ又繼發症アリト雖レ其

腎臟結核ニ獨發症アリ又繼發症アリト雖レ其

腎臟結核ニ獨發症アリ又繼發症アリト雖レ其

腎臟結核ニ獨發症アリ又繼發症アリト雖レ其

腎臟結核ニ獨發症アリ又繼發症アリト雖レ其

腎臟結核ニ獨發症アリ又繼發症アリト雖レ其

獨發症ハ太々罕ニシテ大抵皆他部ノ結核症ニ
 繼發スル者ナリ蓋シ諸結核病ニ由テ死スル者
 ヲ剖觀スレハ腎臟ニ於テモ亦結核ヲ生スル者
 百人中ノ五人乃至六人ニ居リ小兒ニ於テハ百
 人中ノ十五人乃至十六人ニ及フト云フ
 現症獨發性ノ腎臟結核症ニ於テハ腰部ニ鈍痛
 ヲ覺エ小便頻數トナリ其尿初ハ混濁ニシテ
 或ハ少シク血ヲ交ユレト終ニ全ク膿様ニ變
 レル體羸瘦シテ勞熱ヲ發スルニ至ル乃チ此結
 核症ニ於テハ大抵皆他ノ臟器殊ニ肺ノ結核ヲ

併發スルカ故ニ此症ヲ以テ肺勞ノ合併症ト做
 スアリ其他腸管ニ亦之ニ連累セラルト甚
 タ多シ而シテ其死ヲ致スヤ通例唯虚衰ヲ極ム
 ルニ由ルト雖モ兩腎共ニ侵サルハ尿毒症
 ヲ發シテ之カ為ニ不幸ニ陷ルトアリ
 經過此病ノ經過ハ各々異ナリ其短ハ二三個
 月ヨリ長ハ二年或ハ三年ニ及フ者アリ
 識別此病ハ初ハ甚タ鑿別シ難キ者ニシテ唯結
 核ノ已ニ軟化スルニ至テ始テ之ヲ認ム可キノ
 即チ然ルキハ尿中多量ノ膿液ヲ混シ之ヲ顯

微鏡ニ照セハ其中ニ顆粒狀ノ碎屑結締組織ノ
纖維及ヒ糜爛セル粘液膜ヨリ剝離シタル網狀
美麗ノ彈力纖維ヲ視ルヘシ其他時トシテハ結
核ヲ混スルコトアリ即チ此物ハ醋酸ニ溶解シ難
キヲ以テ知ルヘシ尚之ニ兼テ患者大ニ衰弱羸
瘦シ且勞熱ヲ發スルハ愈以テ腎ノ結核症々
ルコトヲ證スルニ足ル但シ此結核症ニ於テハ腹
内硬腫ヲ觸ルコトナク亦尿血ヲ起スコトナキヲ
以テ之ヲ腎ノ癌腫症ト鑿別スルヲ得可シ
療法 此病ノ療法ニ就テハ未タ新規ノ方法ナ
ル

ヲ識ラス畢竟唯肺勞ニ於ケルカ如ク之ヲ療ス
ヘシ學者宜ク肺勞篇ヲ參考スヘシ

腎臟ヒダチド病

腎ノ「ヒダチド病」ハ肝若ハ肺ノ「ヒダチド病」ヨリ
モ鮮ナシト雖ハ之ヲ體中他部ノ「ヒダチド病」ニ
比スレハ殊ニ多シ又左右ヲ以テ論スレハ左腎
ヲ侵スコト最モ多シ

本註 ダ左「レン」氏ノ說ニ隨テ「ヒダチド病」ノ多

寡ヲ次第スレハ即チ第一多キハ肝臟ニシテ

外科摘要 卷八

金華齋藏粹

是ヨリ肺腎、孟、腦、諸骨、軀幹ノ外郭等ニ至テ追
次ニ減少スト云フ

凡ソ此ヒダチド病ニ於テ其細蟲ヲ被包セル膜

囊ノ已ニ破裂スルハ口ヲ腎盂ニ哆テ囊中ノ

水液ヲシテ半バ或ハ全ク輸尿管ニ漏泄スル者

最モ多シト雖モ或ハ又胃腸若ハ肺ヲ穿テ漏泄

スルコトアリ但シ其未タ破潰セサル者ニ於テハ

腹ノ偏側ニ於テ腫脹ヲ現ハシ結腸ハ必ス手ヲ

以テ之ヲ按スレハ多少波動ヲ覺エ又時トシテ

ハ要謂ルヒダチドフレミ去ス按スルニシテ一種ハ

魚卵如キ者ヲ云フ觸知スルコトアリ又其已ニ

破潰セシ者ニ於テハ其液中ニ全キ水胞或ハ一

個ノ碎屑ヲ見ルコトアリ而シテ此碎屑ハ之ヲ顯

微鏡ニ照セハ其中ニ蟲鈎油分子及ヒ層々相疊

リタル線條等ヲ見ルヘシ

但シ其漏泄スルヤ連綿持續セス一旦止テ二三

週或ハ一二年ノ後再ヒ来ル者ニシテ其將ニ漏

泄セントスルハ俄然トシテ寒戦、嘔吐、吃逆及

ヒ疝痛ヲ起スヲ屢之アリ而シテ後其水胞已ニ

漏泄スルハ諸症自ラ緩解スルヲ得可シ然モ

ニ

ニ

ニ

ニ

ニ

外科摘要 卷八

藏餘齋藏粹

其水胞尚膀胱中ニ止マルノ間ハ之カ為ニ其部
ノ疼痛刺衝及ヒ尿閉ヲ起スニアリ夫レ斯ノ如
ク一旦漏泄スルキハ每常必ス暫時ノ間ハ著シ
ク腫脹ノ減小スルヲ見ルヘシト雖モ若シ其水
胞輸尿管ニ阻滯スルキハヒダチド固有ノ腫脹
ニ兼テ腎臟水腫ヲ發スルニアリ
豫后腎ノヒダチド病ハ蓄液ノ排泄ニ便ナルヲ
以テ子宮ヲ除クノ外ハ之ヲ他部ノヒダチド病
ニ比スレバ其豫后殊ニ安全ナリトス然モ其蓄
液若シ腎及ヒ輸尿管ニ依テ漏泄スルヲ能ハサ

外科摘要 卷八 三十七 藏餘齋藏 辛

ハ其腫脹益増大シテ他部ヲ侵掠スルニ至
リ膿潰ヲ起シテ巨大ノ潰瘍トナリ之カ為
ニ危険ヲ致スニアリ

療法

此病ニ於テハ彼ノ細蟲ヲ殺シ且之ヲ驅泄

セシカ為ニ醫家各的列並油、沃度、剝、篤斯、硝酸、剝
篤斯、蒲公英等ヲ称用セリ又齊シク殺蟲ノ目的
ヲ以テ越列幾的兇法ヲ試ミシガ其効果シテ空
シカリシトナリ又水胞ノ輸尿管ヲ通スルニ當
テ腹痛即チト病ヲ起スルハ猶結石ニ於ケルカ
如ク温浴ト阿片トヲ以テ之ヲ療スルヲ良トス

外科摘要 卷八 三十七 藏餘齋藏 辛

外科摘要
卷八
三十八
藏餘齋藏辛
金韓齋補林

其他若シ膀胱部ノ疼痛若ハ尿閉ヲ起スルハ宜ク身體ヲ安静ニシ且緩和ノ飲料即チ亞麻仁煎等ヲ用フヘシ又時トシテハ止ムコトヲ得スカテートルヲ使用スルコトアリ加之ナラズ其水胞ノ尿道ニ壅滯スルハ宜ク手ヲ以テ之ヲ押シ出スヘシ又其腫脹愈増大シテ之カ為ニ生命ノ危険ヲ慮ルハ先ツ細キ套管鍼ヲ刺シ其液少許ヲ取テ之ヲ検査スルニ密閉セル腎ノヒダチド腫タルト亮然タル者殊ニ其背部ニ腫脹スル者ニ於テハ瀉水術ヲ行フモ亦可ナリ又外科醫某ハ其前

部ニ腫脹スル者ニ於テレカミール氏ノ法ニ隨テ急ツ其部ニ數回蝕性加里ヲ外敷シテヒダチド腫ノ膜囊ト腹膜トノ癒着ヲ起サシメ而シテ後截開術ヲ施スヲ良トス然ルニ三日毎ニ套管鍼ヲ刺シ以テ徐々ニ其蓄液ヲ瀉スルハ其術安全ニシテ遙ニレカミール氏ノ法ニ優レリ曾テ一患者此術ニ依テ大ニ輕快ヲ得シ者アリ

膀胱炎
シスチ、ス旬

膀胱炎ハ之ヲ區別シテ急性慢性獨發症繼發症

外科摘要
卷八
三十八
藏餘齋藏辛

及ヒ損傷ニ因スル者等トス
原因急性膀胱炎ハ打撲或ハ其他ノ損傷或ハ膀胱内ノ尿砂、尿石若ハ腎ヨリ来ル所ノ「ヒダ」トド胞或ハ刺戟性ノ利尿藥或ハ尿道狹窄ノ為ニ其尿ノ久シク膀胱内ニ渫溜シテ變敗スル者等ニ由テ之ヲ發シ又慢性膀胱炎ハ前件ノ原因荏苒持久シ或ハ數回反復スルニ由テ發スル者ナリ
現症急性ノ膀胱炎ニ於テハ患者膀胱部ニ疼痛ヲ覺エ小便頻數ニシテ其通スル時尿道燒クカ如ク頻ニ努責スレモ快利スルヲ得ヌ寒熱往來

シ其膀胱ハ時トシテ稍腫脹シテ圓塊ヲ為シ之ニ觸ルハニ知覺銳敏ナリ加之ナラス惡性ノ者ニ於テハ嘔吐、憔悴、謔妄、冷汗等ノ症狀ヲ發シ其尿ヲ検査スレハ少量ニシテ之ニ膿及ヒ血液ヲ混シ且亞兒加里性ニシテ腐臭ヲ放ツ者ナリ慢性ノ膀胱炎ニ於テハ大抵諸症太々緩慢ナリト雖モ亦膀胱部ノ知覺銳敏ニシテ刺衝機旺盛シ小便頻數ニシテ快利スルヲ能ハス之カ為ニ患者ヲシテ甚々困苦セシムルニ至ル但シ其尿ハ唯之ニ粘液ヲ交エ或ハ粘液及ヒ膿液ヲ混シ

テ白濁ナル者アリ
療法 急性ノ膀胱炎ニ於テハ身體ヲ安静ニ保護
 シ耻骨ノ上際ニ水蛭若ハ吸角ヲ貼シ或ハ會陰
 ニ水蛭ヲ貼スルヲ以テ必要トス又下劑ヲ用ヒ
 ント欲セハ蓖麻子油ヲ與フルヲ最モ良トス又
 半身浴ヲ行フテ大ニ緩解ヲ得ルコトアリ十三其他多
 量ノ亞麻仁煎ヲ用ヒ疼痛劇甚ナル者或ハ神經
 ノ過敏ナル者按スルニ不ニハ阿片、菲沃斯若ハ
 莨菪ヲ用フルヲ要ス但シ數、鎮痛藥ヲ要スル者
 ニハ阿片若ハ莨菪ヲ以テ多ポシトリ第百一十篇

十四方及ヒ第百ヲ製シテ之ヲ肛門ニ挿入シ或
 ハラウダニムヲ以テ灌腸法ヲ行フヲ最モ良ト
 ス然レモ慢性ノ膀胱炎ニ於テハ急性ノ者ニ於ケ
 ルカ如ク局處ノ瀉血ヲ要セス且上件ノ方法モ
 亦只時々之ヲ用フヘキコトアルコト乃チ此症ニ
 於テハ石灰水ニ「グリセリン」ヲ加タル者或ハ稀
 薄ノ硝酸銀水、丹礬水若ハ鉛糖水或ハ「グリセリン」
 者等ヲ以テ注射法按スルニ膀胱ニ「カ」テ「ト」
 ヲ行フモ亦其効ヲ奏スルコトアリ蓋シ「カ」テ「ト」
 使用ハ急性慢性ノ論ナク時トシテハ缺ク

外科摘要 卷八 金卓齋著

可ラサルコアリト雖凡可^{ナル}成^タ之ヲ用ヒサルヲ
要ス何トナレハ數之ヲ行フキハ之カ為ニ尿道
ヲ刺衝スル、弊害アルヲ以テナリ^{十三}

尿閉 レテニヒン、オス、
ユネン英

抑、尿閉ノ外科的ニ属スル原因及ヒ經過ハ固ヨ
リ此書ノ論スル所ニ非ス故ニ唯、醫家日常目擊
スル所ノ如ク他病ノ經過中其傍症ト為テ發起
セル尿閉ヲレテ之ヲ約說セシト欲スルノニ夫
レ尿閉ハ形器的ノ壅塞ニ起因スル者アリ例之

ハ尿道狹窄、尿石等ニ於ケルカ如シ或ハ專ク痙
攣性ニシテ膀胱頸ノ激衝性充血ヲ兼ヌル者或
ハ特リ痙攣性ノ者アリ例之ハ荒菁若クハ的列
並油ノ作用等ニ於ケルカ如シ或ハ又膀胱ノ麻
痺ニ由ル者アリ例之ハ秩扶斯熱、泰衰土熱其他
ノ虚性熱及ヒ全身衰弱ニ於ケルカ如シ但シ此
尿閉症ト腎臟分泌機ノ廢止セル者トハ須ク之
ヲ識別セシコトヲ要ス殊ニ虚性熱ニ於テハ之カ
檢査ヲ怠ルキハ其尿閉セルモ等閑ニ看過スル
コトアリ故ニ醫其患者ニ臨マハ曾テ小便ニ行キ

内科摘要 卷八 平一 載餘齋藏

シヤ否ヤヲ問フコトヲ忘ル可ラス其他諸般ノ劇
性病ニ於テモ亦日々時ヲ定メテ之ヲ検査スル
一實ニ肝要ナリ又身體衰弱セル患者ニ於ケル
半ハ麻痺性ノ尿閉ハ通例「カテートル」ノ使用ヲ
要スル者ニレテ即チ之ヲ診スルニ耻骨ノ上際
膨脹レテ其部ニ打診ヲ行フハ必ズ濁音ヲ發
シ且十二時間乃至二十四時間全ク小便ヲ通セ
ス或ハ僅ニ滴瀝スルヲ見バ速ニ之ヲ施シ症ニ
隨テハ少クモ日々一回宛之ヲ行フヲ要スルコ
トアリ

又瘧瘵症尿閉ハ尿道狹窄若ハ尿砂ノ有無ヲ論
セスカテートルヲ廢シ他ノ療法ニ賴テ之ヲ緩
解セシコトヲ要ス例之ハ半身浴ヲ行ヒ患者ヲシ
テ半時間浴湯中ニ止マラシムルヲ良トス其他
布片ヲ熱湯ニ浸シテ會陰及ヒ耻骨ノ上際ヲ温
蒸シ又會陰ヲ按シテ其最モ痛ヲ覺ユルノ部ニ
水蛭ヲ貼スレハ屢局處ノ緊張ヲ緩解スルノ効
ヲ得ルコトアリ然レ此等ノ療法一モ其効ヲ奏セ
サル者ニ於テハ「ラウダ」ムノ灌腸法或ハ阿片
若ハ莨菪ノ「ソポレトリ」法前ニ見ユヲ行フモ亦可

内科摘要 卷八 金章齋藏本

ナリ又劇甚ノ痙攣症ニ於テハ止ムコトヲ得ス麻
醉藥ノ嗅引法ヲ施スヘキコトアリ或ハ又之ニ莫
兒非ノ皮下法入法ヲ称用スル者アリ
遺尿 イレユレシス旬
大人ニ於テハ痲痺或ハ局處損傷ニ由ルニ非ス
ニハ此遺尿症ヲ發スルコトナシト雖モ小兒ニ於
テハ常ニ多ク見ル所ニシテ殊ニ夜間之ヲ發ス
ル者多シ

療法 其兒ヲレテ卧床ニ就カシムルノ前暫時ハ

間總テ飲液ヲ多ク用ユルヲ戒メ且睡眠中ニ三
時毎ニ其兒ヲ起シテ小便ヲ促スルハ大抵之ヲ
防クコトヲ得ヘシ又醫藥ハ其効確實ナラスト雖
モ就中其最モ称用セララル者ハ即チ菘菖安息
香酸及ヒ格魯兒化鍊丁幾ナリトス^{十四}
第百二十六方 安息香酸^三ニ桂水^六ヲ取り溶和
シテ日ニ三次半汚許ヲ與フ
又傍人ノ説諭ヲ以テ其兒ヲシテ羞惡ノ心ヲ懷
キ自ラ悔悟セシムル片ハ精神ノ感動能ク遺尿
ヲ治スルノ作用ヲ為スコトアリト雖モ是レ全ク

内科摘要 卷八 四十三 戴余齋藏本

其兒ノ智慧事理ヲ辨別シテ自ラ大ニ注意シ得ル者ニ非スハ能ハサル所ナリ

華氏内科摘要卷之八終

卷之八増補

腎臓充血

一 又通例上皮ノ細胞ヲ現ハス者多シ

尿毒症

二 但シ本病ノ昏睡症ニ於テハ體温常ニ増進スレ

氏阿片ノ中毒症ニ於テハ却テ減却スルヲ以テ

鑒別ノ一助トス

三 タラウベ氏ノ説ニ據レハ「グリフト病」ニ於テ所

謂尿毒性諸症ヲ發スル所以ハ即チ腦水腫ニ係ル者ナリト云フ

外科高要 卷八

金車齋藏梓

四

其他カイヲン氏ノ主唱セシ所ノ如ク肝モ亦共ニ血中ノ尿素ヲ泌別スルヲ助クルニ似タリ而シテ其病性急劇ニシテ且身體強實ナル者ニハ刺絡ヲ行フヲ良トス特ニ「ドクトル、ビー、ダブ」リユー、リチャードソン氏ハ尿毒症第一ノ療法トシテ専ラ刺絡ヲ讚賞セリ「ドクトル、エ、エル、ローミス」氏ハ曾テ尿毒症ノ擗ヲ發スル者ニ莫兒非ノ皮下注入法ヲ行フテ良効ヲ得シ「ア」リト云フ

五

六

加之多少風土ニ關係スル所アリ今諸般ノ疾病ニ死スル者ト腎臟病ノ為ニ死スル者トヲ比較スレハ倫敦ニ於テハ「一」ト四九、巴里ニ於テハ「一」ト二二六、印度ボム「バ」イニ於テハ「一」ト四三〇三ニ當ルカ

七

又其腎白色滑澤ニシテ變大スル者アリ是レ元燼衝後ノ續症タルニモセヨ或ハ其始メ慢性ノ消耗症タルニモセヨ現在脂化ニ由テ斯ノ如キ形状ヲ為ス者ナリ「ド」クトル、チー、グレーン「ジ」ル

外科高要 卷八 增補二 載除齋藏梓

金朝齋藏本

スチウアルト氏ハ「フリフト病ニ於ケル腎ノ變化ヲ分テ三種トス即チ其一ヲ燼衝症トシ更ニ之ヲ分テ燼衝期、脂化期及ヒ消耗期ノ三期トス其二ヲ蠟様即チ澱粉様變質症トシ更ニ之ヲ分テ血管變質期、尿管第二ノ變質期及ヒ消耗期ノ三期トス又其三ヲ變硬症トス又特ニ「ヂツキンソン氏ハ之ヲ腎臟尿管ノ疾患ト甲シ尿管ノ間ニ起ル所ノ疾患及ヒ血管ノ病トノ三種ニ分ツノ裨益アルヲ論述セリ又ドクトル、ジョー、ジジョンソン氏ノ證明スル所ニ據レハ「グリフト病

ニ於テハ腎臟中遍ク分布スル所ノ細血管實質ノ變厚スル者ナリト云フ蓋シ本病ニ於テ早ク已ニ腎臟動脈系ノ變化ヲ呈ハスヤ一般器質變化ノ一部分タルニ似タリソル、ウキルリアーム、ゴール氏及ヒ「ドクトル、エツチ、ジョー、レユットン氏ハ依然トシテ左ノ説ヲ主張シ曰其腎臟疾患ハ當ニ「アルテリヲカピルラリ、フキプロレス毛様動脈纖維ト名クル所ノ全身血管病ノ一部分タルニ過キスト蓋シ其腎臟血管ノ變化ニ二様アリ一ヲ動脈變質トシ一ヲ尿管

内斗商要 卷八 増補三 蔵本齋藏本

外科摘要 卷八

錢翰齋藏本

實質ノ肥厚トス然西兩様相夾雜シテ同時ニ發見スベキ者ニ非ス而シテ其病泌尿管内ニ在ル并ハ血液ノ流通ヲ妨ケテ之カ為ニ腎動脈筋組織ノ肥厚ヲ生スルヲ心臟モ亦隨テ肥大ヲ為スカ如シ但シ其病甲乙泌尿管ノ間ニ位シテ動脈ノ纖維様變質或ハ他ノ變質ヲ致ス者モ亦多ク之アリ是レ諸般ノ實證ニ依テ通知スル所ナリ又ブリフト病ニ於テ死ヲ致ス所以ハ概子之ヲ尿毒症ニ歸スルヲ穩當トス乃チ其尿毒タルセトクス氏及ヒ「トリース」氏ノ說ニ據レハ安母尼

亞或ハ其塩類ナリトス然血中常ニ存在スル所ノ安母尼亞分ヲ計算スルニ未タ必シモ此中毒症ヲ起スニ足ラス況ヤ尿素ニ於テ「ヤ」フ「ル」ツ氏リツテル「ス」等ノ實驗ニ據レハ敢テ害ナキ者ニ似タリ故ニ未タ其尿毒ノ何物タルヤヲ究ムル「能」ハサルナリ又猩紅熱後或ハ「ヂ」フゼリア或ハ他ノ急性病中一時ノ模様ニ由テ蛋白尿ヲ起ス「ア」リト雖「本」來慢性ブリフト病ト異ナル「論」ヲ「埃」タ「シ」ルナリ故ニ此慢性ブリフト病ハ初ヨリ「燦」衝ナク

外科摘要 卷八 增補四 藏徐齋藏本

利... 金... 朝... 齋... 齋... 齋...

シテ直ニ變質ヲ致ス者ト看做シテ可ナリ但シ
已ニ其素因ヲ具フル者ニ於テ若シ燼衝性ノ疾
患ヲ傍發スルハ猶他ノ變質症ニ於ケルカ如
ク之カ為ニ本病ヲシテ増進セシムルヲナシト
セズ

八

ドクトル、ドンキン氏ハ總テ他ノ食物ヲ廢シテ
日々唯スキムミルキ牛乳ヲ煮テ上ニ浮ミタ六
ル乳酪ヲヒヘ去ル者
パイント乃至七パイントヲ與フルヲ良トス
又比利時國ブリュッセル府クライニ一氏等ハ之ニ
沃度剥篤斯ヲ讚賞ス

九

蜜尿病

十

但シ漸々羸瘦衰弱スル者ニハ肝油其他ノ強壯
劑ヲ用キンコトヲ要ス「イムマン氏ノ如ク肝油ヲ
塗擦スルモ亦同効アルニ似タリ又ドクトル、ド
ンキン氏及ヒ「ガリーソンホウ氏ハ他ノ食物ヲ廢
シテ唯スキムミルキ「ノ之ヲ與ヘテ恢復ヲ得シ
コトヲ報告シ碩學カンタニー氏及ヒ「プリマウエラ
氏ハ單ニ肉餌ヲ與ヘ之ニ兼テ每食時乳酸水二
及
水六汚及ヒ稀亞兒箇兒半汚水六ヲ用キレハ必
ス偉効アルコトヲ確證セリ千八百七十三年第三
月一號紐克醫事雜誌

内斗高要 卷八 增補五 載余齋齋齋

内科指要 卷八

錢卓齋藏本

ニ掲載 蓋シ其乳酸及ヒ亞兒箇兒ヲ用キル所以
セリ 即チ糖質及ヒ澱粉質ノ食物ヲ用キルノ代リ
ニシテ全ク糖分ヲ釀成スヘキ物質ヲ絶ツニア
リ又エム、レフアルト氏ハ一患者瓦兒華尼法ヲ施
シテ恢復ヲ得シコアリ其法一極ヲ項后ニ貼シ
又一極ヲ肝部ニ貼セシト云フ 千八百七十二年
里医事新聞ニ 掲載セリ 第四百十三日巴

腎臟膿瘍

曾テ「¹」エル氏トロウシウ氏ボウヂツチ氏及ヒ
其他ノ醫家モ亦一種稀有ノ病トシ腎臟外膜ノ

十二

潰瘍ヲ論載セリ即チ其徵候ハ腰部ノ疼痛、腫脹
惡寒、發熱羸瘦、衰弱、及ヒ患側下肢ノ倦怠等是ナ
リ又之ニ胸膜或ハ肺ノ疾患ヲ合併スルコトアリ
ドクトル、ボウヂツチ氏ハ其膿ヲ排泄セシカ為ニ
截開術ヲ施シ二三週或ハ一二月ニシテ恢復ヲ
得シ者三名ニ及ヒ紐克ノ医家ドクトル、エフ、チ
、レシテ氏モ亦方腰筋ヲ截開シテ腎臟ニ達シ
排泄管ヲ挿入シテ其膿ヲ漏シ之ニ由テ終ニ全
治ヲ得シコトアリト云フ

膀胱炎

内科指要 卷八

増補 載余齋藏本

内科摘要 卷八 金卓齋著

十二 然其熱熾ナル者ニハ小氷片ヲ直腸ニ挿入シ

テ輕快ヲ得ルヲアリ

十三 又膀胱注射法ヲ行ハント欲セハ精細注意ヲ要

ス何トナレハ若シ其液多量ニシテ之ヲ注入ス

ルト強劇ニ過クルキハ却テ害ヲ招クヲアルヲ

以テナリ況ヤ衝動劑ノ濃溶液ニ於テヲヤ殊ニ

慎マストハアル可カラス

遺尿

十四 或ハ之ニ格魯羅兒敵度刺篤ヲ用テ偉効ヲ得

シトアリト云フ沃實鐵ニ於ケルモ亦然リ

卷之八増補終

内科摘要

全部貳拾貳册

桑田衡平藏板

東京藥研堀町

馬喰町二丁目

島村屋利助

通三丁目

丸屋善七

疾元書林

同二丁目

山城屋佐兵衛

藏今齋藏辛

